

# 絆

NAGASAKI UNIVERSITY HOSPITAL

長崎大学病院

IWATE

東日本大震災医療支援活動報告集

MIYAGI

FUKUSHIMA



NAGASAKI





## 前へ復興へ 被災者の話に耳を傾ける

医師 瀨田 久之（医療教育開発センター）

南相馬の朝は早く、ホテルの薄いカーテンのせいもあり、毎朝5時に目覚めた。出張先で知らない街を走ることが習慣になっているので、今回も毎朝走った。ホテルの前の国道を南に向かって走る。国道沿いのガソリンスタンド、コンビニエンスストア、紳士服、パチンコの店舗が続き、その後ろには、住宅や田畑、遠くに山が見える。どこにでもある地方都市の風景が続く。5月の南相馬の朝日は柔らかく、風は優しい。しかし、街には人の気配を感じず、時々すれ違う車は迷彩色の自衛隊車とパトカーだけだ。3kmほど走ると、数台の自衛隊車が道を封鎖していた。心拍数が上がり、汗がにじむ。左側、東の方へ進路を変える。田畑が広がってくる。今の時期、苗が植えてあるはずの田んぼは潮の強い香りがする。田んぼの中に船が転がっている。川を渡り防風林を越えると、風景は一変し、白黒の世界となる。目の前に瓦礫の世界が広がり、ずっと向こうの海まで続いている。

毎朝、瓦礫の中を走り続けると、錯覚を起こすことがあった。自分は1945（昭和20）年の長崎の街を走っているのではないか。実際には見たことはないが、白黒写真で何度も見たことがある、祖父が実際に見た瓦礫の長崎を。「じいちゃんは、瓦礫の中を…」と父が振り返る話を聞いたことがある。

南相馬でも、振り返る話を聞くことができた。訪問診療をした農家で、老夫婦が「昔はね、蚕を飼っていてね…」、避難所で男性が「南相馬は野馬追。俺もね…全部流された…」、医療スタッフが「あの時は、地獄だった、もう無理、私無理だった…」。2カ月を過ぎ、さまざまな振り返りが始まっていた。

私たちの役目は、その話を聞くことだった。たぶん、人は振り返ることで、前へ進むのであろう。振り返り、学び、前へ。前へ進み、そして振り返る。振り返ると、祖父母と父母の時代、長崎は、日本は、復興した。私たちの時代、そして子どもたちの時代、できるだろうか？ 前へ進めるだろうか、長崎は、福島は、日本は。そんなこと

を考えながら、南相馬で走り続けた2011（平成23）年5月だった。iPodからは猪苗代湖ズの曲がエンドレスで流れた。



♪明日から 何かが始まるよ ステキなことだよ  
 明日から 何かが始まるよ 君のことだよ  
 I love you baby ふくしま  
 I need you baby ふくしま  
 I want you baby 僕らは ふくしまが好き♪



## 地元医療の自立支援へ 開業医受診を促す

医師 原 信太郎 (第二内科)

当時、南相馬市の住民は少しずつ戻ってきていて、4万5000人ほどいた。緊急時避難準備区域は、本来子供や妊婦・重症患者の立ち入りが許可されていない区域ではあったが、相当数の子供も生活しており、もうほとんどマスクをしている人は見かけなかった。コンビニは開店しており、外食産業もファストフード店とファミリーレストランが開店していた。

福島第一原発事故の影に隠れていたものの、津波被災地の視察では相当の範囲で津波被害があったのだと実感した。瓦礫はある程度片付けられ、所々に山積みになっていた。その瓦礫に白や青の旗がささっており、「あれはご遺体の捜索済みのサイン」と教えてもらい切なくなった。想像をはるかに超える惨状を目の当たりにし、皆ショックを受けた。

われわれの活動はこれまでの在宅支援から、避難所診療に移行していった。特にこれまでのチームは午後5時までの活動であったが、夕方以降に避難所に帰ってくる人を診療できるように、午後8時まで活動時間を延長した。一方、開業医は相当数が戻ってきており、現地の医療の自立のためにも、避難所診療所では極力処方控え、開業医への受診を促すことに専念した。

被災者たちはまだ大変な状況にあるものの、震災から2カ月が経過し、避難所生活の上げ膳据え膳の生活に慣れてしまっていて、外に出て活動する気力をなくしてしまっている人々が見られた。こうした人々にとって前へ動き出すきっかけともなるべく、避難所は閉鎖する方向で調整されていた。しかし仕事も家も失った人々にとって、何でも用意されていた避難所から、すべて自分で用意しないといけなくなる仮設住宅への移行には、多くの困難が待ち構えていることは容易に想像できた。

「この歳になって、世の中当たり前のものなんて一つもないんだって初めて思い知らされた」「原発が落ち着かない今、皆になんて声をかけて、どういう方向で復興を目指せば良いか、いまだに分からない。」「楽しみにしていた今年の野馬追は開催が難

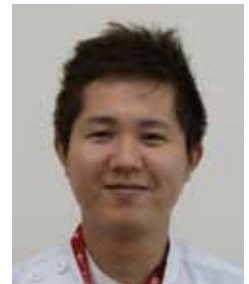
しい。けどいつか盛大に開催できたときには、長崎の先生たちを招待して特等席で見たい」。被災者からの生の声に心打たれることも多々あった。

今でも被災者の方々は大変な思いをしている。われわれとともに活動した現地スタッフも、また家族や友人を亡くした被災者である。1カ月前はまったく笑えなかった。しかし、皆、笑顔を見せてくれる。われわれにできることは、被災地の現状を広く知らせること、何らかの形で支援・応援を続けていくこと。現地の皆が心からの笑顔を取り戻せる日を、また盛大な野馬追が開催されることを祈って、締め言葉としたい。



## 劣悪な衛生環境 心のケアが重要に

看護師 田下 博 (ICU・血液浄化療法部)



3月22日午後5時に大槌町到着し避難所に入った。避難者数は450名前後。弓道場が避難所となっていたためか、人が動くたびに土ぼこりが舞うような状況であった。被災者は土間に段ボールを敷いて、その上に布団を敷いて生活していた。仕切りはなくプライベート環境はなかった。暖房は石油ストーブが4、5台、薪ストーブが3台設置されていたが十分な暖房効果ではなかった。ちなみに外は雪が降り、夜間は氷点下に迫るぐらいの気温であった。

仮設トイレが6機あったが臭気があり、時には排泄物が流れずに溜まっていることもあった。避難所内にもトイレはあったが、下水が機能していなかったため流水できず、排便は新聞紙の上にしてそれを包んで処分していた。生活、衛生環境は良くないと思えた。トイレ清掃は避難者が交代で1日1回施行していた。自衛隊が提供した男女別の浴槽風呂があり、入浴は可能であった。

診療所は避難所の一角に設けてあり、地元開業医の植田先生、看護師4名が診療を行っていた。私も同行した河野先生と診療に当たった。1日当たり100名前後の方が診察に来られ、主な症状は咳や咽頭痛といった風邪症状であった。診察、バイタルサイン測定を行い、見合った内服薬を日数分配薬した。

また、持病（特に高血圧）の薬を内服されている方で薬が切れて無くなったと訪ねてきたときには薬を配った。内服薬がストックにない場合は類似薬で対応をしていたので、薬剤師がいると助かると思った。ある時は、家屋の片づけの最中に怪我をしたとのことで洗浄・消毒・縫合を行ったり、嘔吐のため点滴を施行したりすることもあった。避難所が土間で土ぼこりが舞う状況のためか、扁桃腺炎、咳、喀痰、鼻汁、目のかゆみなどの症状が多数であった。改善策として土間にブルーシートを敷き、その上に簡易式の畳を敷いた。その後、咳症状は若干改善している印象であった。

また、動きやすくなったためか子どもたちが活発に遊び始めたのも印象に残った。しかし、余震が続き、慣れない環境でもあり不安を訴える被災者もいた。今後の関わりとしては、心のケアは必須だと感じた。また植田先生をはじめとした地元の医療スタッフも被災者であるので、本当ならば自分のことで手がいっぱいと思われる。継続した医療支援は地元の人々の支えになると思うので続けていけたらいいと思う。また、私たちも災害訓練を行い備える必要性を感じた。



絆～長崎大学病院 東日本大震災医療支援活動報告集～

---

2012年5月10日 発行（非売品）

---

企 画・発 行

長崎大学病院

長崎市坂本1丁目7-1

TEL 095-819-7200（代表）

---

編 集・制 作

合同会社 崎陽舎

---

印 刷

有限会社 正文社印刷所

---

◇禁無断転写・複写

◇落丁、乱丁本はお取り替えいたします。